平成３０年度流山市平和大使広島派遣事業

「平和大使として広島へ行って」

作文集

この作文集を手に取っていただいたあなたへ

私たちは、「平成三十年度流山市平和大使」に選ばれた小学五・六年生二十一人です。

私たち平和大使は、八月五日、六日に平和の尊さを学ぶために広島へ行き、そして、学び、感じたことを作文集にまとめました。

被ばく体験伝承者から貴重なお話を伺い、平和記念資料館を見学した中から、私たちの想像を超える、原子爆弾の恐ろしさや悲惨さ、そして、現在でも多くの人々がつらく悲しい思いをしていることを知りました。

平和記念公園では、「原爆の子の像」のもと、流山市民の皆さんの平和への思いが込められた千羽鶴を献納し、八月六日の平和記念式典には、安倍首相はじめ、国内外の代表者とともに私たちも参列し、原爆が投下された八時十五分に黙とうを行い、犠牲になられた方々のご冥福を祈りました。

私たち平和大使の任務は、終わっていません。それは、私たちが広島で学んだこと、感じたことを家族や友人に伝え、より多くの人に知ってもらい、平和のバトンをつなげていくことです。

この作文集を読んでいただいた方も、私たちと一緒に平和への想いを次世代につないでいきましょう。

平成三十年度　流山市平和大使

◆目次◆

・作文「平和大使として広島へ行って」1～23ページ

「平和の大切さ」　押川　佳溫（東小学校５年）　1ページ

「心に残った広島」　牛木　麻溫（おおたかの森小学校５年）　2ページ

「くり返さないために」　佐々木　郁弥（長崎小学校５年）　3ページ

「原爆のおそろしさ」　神山　拓輝（おおたかの森小学校５年）　4ページ

「広島で感じたこと」　矢口　真寛（西深井小学校５年）　5ページ

「忘れてはいけないあの一しゅん」

松岡　佑里子（八木北小学校５年）　6ページ

「被爆者から私たちへのつながる平和のバトン」

青柳　怜於奈（江戸川台小学校５年）　7ページ

「平和大使になって知った平和の尊さ」

宮脇　梨奈（江戸川台小学校６年）　8ページ

「広島の悲劇と世界平和」　野澤　梨紗（東小学校６年）　9ページ

「平和の世界になるために」　黒川　沙希（東小学校５年）　10ページ

「73年前の地獄」　古宮　遼　（東小学校５年）　11ページ

「戦争の怖ろしさ」　柏木　悠陽（小山小学校６年）　12ページ

「平和への道」　田野邉　紗英（流山小学校６年）　13・14ページ

「平和大使を通して、感じたこと」

清水　勇志（江戸川台小学校５年）　15・16ページ

「命をうばった広島げんばく」　阿部　綾乃（東小学校６年）　17ページ

「平和への道のり」　酒巻　玲江（おおたかの森小学校５年）　18ページ

「二度と戦争をしない世の中に」　稲垣　百音（八木北小学校５年）　19ページ

「被ばく者の想い」　高橋　直哉（八木南小学校６年）　20ページ

「おそろしい悪まの兵器」　吉田　健浩（鰭ケ崎小学校６年）　21ページ

「広島へ行って思ったこと」　嶽野　颯太（東小学校６年）　22ページ

「平和について」　佐藤　琉生（おおたかの森小学校５年）　23ページ

・写真集　24～28ページ
・流山市の平和に関する取り組み　29ページ

「平和大使として広島へ行って」

「平和の大切さ」

東小学校　五年　氏名　押川侍温

今僕は、毎日「平和」の中で、生きています。今回、流山市平和大使として、広島での体験を通じて、太平洋戦争時代に生きていた人々にとって、「平和」は決して空気のように、当たり前に存在するものではなかったことを知りました。

昭和二十年八月六日に広島に投下された一つの原子爆弾によって、一瞬にして多くの尊い命が奪われ、そしてその後も長い間、放射線による障害で苦しめられたことを被ばく体験伝承者のお話や広島平和記念資料館での写真を見て、僕は、その被害のすさまじさにとても恐ろしく感じました。

七十三年前に、小さな子供が被害に合った写真もたくさん見ました。どうして、何の罪もない子供達までこんな大変な目に合わないといけなかったのだろうと言葉にできないくらい悲しくなりました。

今年の広島での平和記念式典には、世界八十五か国の代表が参加しました。これだけ、世界中のたくさんの国々から参加しているのは、日本の広島や長崎で起こった悲しい出来事が、二度と世界のどこかで同じように起こらないようにしなければいけないという強い思いがあるからだと思いました。

今こうして、僕が、「平和」に生活できていることは本当にありがたいことだと感じました。そして、「平和」は、全員で協力しながら創り上げなければ、できないものだと思いました。

僕は、広島平和大使としての経験から「平和」に生活できていることに感謝するとともに、周りの人たちにも伝え、少しでも「平和」の大切さを知ってもらえるように、努力していきたいと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

心に残った広島

おおたかの森 小学校　5年　氏名 牛木 麻温

七十三年前の八月六日、広島に原子爆弾が投下された。八月六日は天気もよく晴れた。そして、八時十五分、広島の空の上に一つのあかるい光がみえた。そしてそれが落ちなんのつみもないたくさんの人の命が一つの原子爆弾でうばわれた。広島のすがたはいっし、んにしてかわった。外を見ればたくさんの人が「いたいよう、たすけて。」とさけんでいた。子どもをかかえたままたくなったおとさんもいた。そしてやけどでひふがやぶりた人が列をつくって水をもとめていた。中には水をもとめて、川にとびこみたくなったんもいる。どろをみればやきこげた自転車やたくなった人の死たいがたくさんあった。今原爆ドームといわれている建物はもともと産業しょうれい館という建物だった。当時産業しょうれい館にはたくさんの人がいて、原爆がおちたしょんかん産業しょうれい館にいたすべての人がたくなった。建物の半分以上がこわされ、今もこわされたかれきなどが中に

おちている。

当時たくなった人はおよそ十四万人でセ十三年たったいまでもこういしょうで苦しんでいる人がいる。ひばく者たちは、このような悲しいできごとがせかいにあってはならない。原子爆弾が世界にあってもならないと。私は実さいに広島に行って、原爆ドームや平和記念資料館などを見て、原爆はとてもおそろしいことがあらためてわかりました。資料館では八時十五分で止まってしまった時計やけこげたワンピースやオバマ前大とうりょうが祈った折りづるなどたくさんの物を見て学びました。私はこのような悲しいことが二度とあってはならないと思い、全世界のかくへいさがなくなってほしいと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

くり返さないために

長崎　小学校 5 年　氏名佐々木都弥

昔、8月6日広島でとてもおそろしいこと起こった、というのは知っていました。でも、平和大使になり色々と調べ、そして広島へ行き伝しよう者の話しや平和記念資料館や平和祈念式典に参加して73年前の8月6日に本当に起こった事を知ることができました。あまりにもひどく、つらい事です。原ばくで皮ふが焼け、ずるりとむけてしまい、手を前につき出して逃げまどう人々。やけどで顔が焼けてしまり誰だかわからなくなってしまったく。かみのもが焼けてちりぢりになって男か女かもわからなくなったぐらい。もし、73年前の8月6日にぼくがいたら。もし、家族がいたら。とても想像ができません。とても、とても、おそろしくて考えられません。また広島平和記念資料館で特に印像に残っているのは、ボロボロの三輪車です。ぼくの妹も三輪車に乗っています。でも、妹の三輪車はボロボロではありません。いつも、楽しそうに乗っています。原ばくがボロボロの三輪車に乗っていた子の笑顔をうばってしまったのです。絶対に許しません。さらに、原ばくの後い症で亡くなった、小学6年生の佐々木さだ子さん。人は、ぼくと同じ名字で年も近くとても、仲良くになりました。さだ子さんは、2才の時に被ばくし、ケガを無くとても元気に生活していました。しかし12才の時に白血病という血液の病気になってしまいました。病気が治ることを願ってつるを折りました。たくさん折り千三百羽になりましたが、亡くなってしまいました。さだ子さんの願いは、戦争も原ばくも無い平和な世界です。ぼくは平和大使としてさだ子さんの願いを伝えます。くり返さないために、ぼくは伝えます。

あの日、広島の空は青く

その空に光った一発の原子ばくだん。

空の下にいたたくさんの人たちの笑顔が消えた。

73年が過ぎて、ぼくは伝える。あの日、広島で起こったことを。二度と笑顔を消さないために、ぼくは伝える。

「平和大使として広島へ行って」

原爆のおそろしさ

流山市立おおたかの森　小学校　5年　氏名神山[illegible]

一九四五年八月六日午前八時十五分、広島に、原爆が投下された。

この投下で何万、何十万の命がうばわれた。町は焼け、爆風で建物はたおれ、たくさんの人々が、血を流しながらひなんしていく、とてもひさんな空間だ。た。

原爆の被害は、半径一キロメートルにもおよび、三百十四万平方メートルが焼けた。

原爆の熱線で多くの人々がひどいやけどを負い、皮ふはただれ、血を流した。

人々は水を求めた。どんな水だろうと、たとえ放射性物質が混さった雨だろうと、水を求めた。なぜならものすごく熱かったから。

当時広島にいなかった人も死んでいる。なぜだ。それは、放射線が残留しているから。そして残留放射線を浴びると、口や耳から血がたくさん出て、ゲリやはいせつ物に血が混ざったりする。最悪の場合、大量出血で死に至ることもある。

だが、無傷でひなんした人も安心はできない。なぜなら、後遺症というものがあるからだ。人々は放射線によって体を正常に動かす細胞がこわされ、あらゆる病気におかされたから。

戦争とは人と人がぶつかり合い、おたがいの正義をつらぬくこと、人々が殺し合うこと、無実の人間が何人もぎせいになること。

この経験から、争いは平和をこわす戦争の原因になること、その争いを止めようとした人もぎせいになること、そして、何よりも相手が傷つくこと、このようなことを学んだ。

小さいころはケンカばかりしていたけど、もうちがう。平和の大切さを知ったから。

そして平和を知った今、広島の教訓を世界に広めることが、一番大切なことだと思った。多少、トラブルは起きるかもしれない。でもおたがいの意見を理解し、それをたがいに分かり合うことが本当の平和だと、ぼくは考える。

「平和大使として広島へ行って」

広島で感じたこと

西深井小学校 5年 氏名 矢口真寛

ぼくは、平和大使になる前から広島に原ばくが落とされたことは知っていました。実際に広島に行き、伝承者のお話を聞き、こわれたままの原ばくドーム、資料館での被害にあった人の写真や亡くなった人の使っていた物などを見て、戦争のこわさを感じました。73年前、広島では普通の人たちが日常生活を送っていましたが、それが一瞬にして地獄に変わってしまったことを想像すると、おそろしい気持ちしかありません。伝承者の話によると、原ばくを落とされた時の中心の温度は数百万度で、水を求めて川に飛びこむ人や、子どもをさがしてまわる母親など大変な状きょうだったそうです。熱線、暴風、放射線のひ害がとても大きく広がり、一九四五年末までに約十四万人の人が亡くなったそうです。今でもたくさんの人が原ばくによる後い症に苦しんでいると聞いたことがあります。ぼくは、いくら戦争とはいえ、何のつみもない市民を苦しめる原ばくは、絶対に悪いものでしかないと思います。でも、最近のニュースでは、「核兵器禁止条約」という世界の核兵器をなくそうとする動きに、日本が反対していると知りました。被ばく国である日本は、さ人成するべきだと思います。広島から帰ってきて思うことは、平和とは空気のようなものではなく、みんなの努力によってかなうものだということです。ぼくたち人間は、反省しなければ、また同じ事を繰り返すかもしれません。戦後73年がたち、戦争体験者がいなくなる時代が近づく中、これからぼくたちにできることは、広島で見たこと、聞いたことをまわりの人たちに伝えていくことだと思います。小学生のうちに平和大使になれたことはすばらしい経験になりました。この経験を活かし、大人になっても平和を願う人間でい続けたいです。

「平和大使として広島へ行って」

忘れてはいけない、あの一しゅん

八木　小学校　五年　氏名　古岡 佑里子

七十三年前の広島、そこには今と同じ大切な家族の姿がありました。しかし、それを原爆はたった一しゅんで消してしまったのです。あの一しゅんを、平和な世界にいる今の私達は決して忘れてはならないのです。

あの一しゅんで広島は平和ではなくなりました。生きる気力をなくした人、死ぬ直前まで「水が欲しい」とうなり続けた人、「お母さん」と泣き続ける幼い子、緑がなくなってしまった焼け野原、これらは決して平和なことではありません。

ところが、今の広島は緑あふれ、生きる喜びに満ちた人々が毎日平和な日々を送っています。七十三年前から、どのようにしてこんなに平和な暮らしを再建できたのでしょうか。それは、たくさんの人々の努力のおかげだと気づきました。たくさんの人々が平和を願い、平和の実現に向けて訴え続けたからだと思いました。つまり、平和はあたりまえではなく、努力し続けているからこそ得られたものなのです。

今の私の考える平和とは、家族や友達と仲良く暮らすこと、やりたいことをやること、そして自分や仲間に誇りを持って生きることだと思います。

くり返しになりますが、七十三年前のあの一しゅんを忘れてはいけないのです。そのために、これからも世界中の人々に戦争、特に原爆はいけないと私も訴え続けたいです。だから、平和の大切さを知ってもらえるように私はみんなで平和とは何かを語り合っていきたいです。そして、世界が今よりもっと平和になることを願っています。

「平和大使として広島へ行って」

被爆者から私たちへつながる平和のバトン

江戸川台　小学校　5年　氏名青柳 怜於奈

私は、平和大使として、世界で最初の被爆地である広島を訪れ、平和の尊さや命の重みを目で見て、耳で聞いて、肌で感じることが出来ました。

そして、現地で何よりもまず感じたのは、原子爆弾のおそろしさでした。被爆体験を聞いた時、原爆は一瞬にして、人々の自由をうばい、幸せや生きる希望、明るい未来をうばってしまったという悲惨な現実を知りました。そして戦争というものは、人々がたがいに争い、にくしみをぶつけ合うというきわめて冷こくな物だと思いました。

しかし、原爆を落した一部のアメリカの人たちは、戦争を終わらせるために必要だという意見もあるようです。けれども、一発の原爆で、尊い命を失い、生きる希望を台無しにしてしまい、七十三年もたった今でも被爆者のかたたちの心に深いきずを負わせてしまっているのは事実です。そういった被爆者の人たちの心によりそい、平和について共に考えていくことが、原爆が無くても世界が平和になるための第一歩だと思いました。さらに、平和記念式典に参列して感じたことが、三つあります。一つ目は、平和について考えることが被爆者から私たちへの「宿題」のように感じました。理由は年々戦争について語りつぐ人たちが減ってきており、これからの日本の未来をになう私たちに、平和ということを考えることが宿題のように感じたからです。二つ目は、戦争を知ることで平和は築かれると思ったからです。理由として、戦争や平和についてみんなで考えることで、一人では、出てこなかった答えが出てくる、と感じたからです。最後に感じたことは、原爆を乗りこえた広島の人々の強さです。どんなにつらいことがあっても、幸せになろうと上を向いて努力をしてきた人々の姿に共感しました。

そして、人の数だけ平和があり、たがいの個性をみとめ合っていくことによって、平和が築かれていくのだと実感しました。

「平和大使として広島へ行って」

平和大使になって知った平和の尊さ

江戸川台 小学校 6年 氏名 宮脇 梨奈

ドアを開けると、たくさんの人たちがいました。みんな折りづるに糸を通しています。ここは、市役所の会議室。今日は、折りづるに糸を通すボランティアに来ました。折りづるは、形が少しずつちがっています。折る人と糸を通す人、広島へとどける人がいます。私たち平和大使は、みんなの思いのつまった千羽づるを平和記念公園にとどけました。

折りづるといえば、原爆の子の像です。佐々木禎子さんは、二歳の時に被爆し、後に白血病になりました。折りづるを千羽折れば病気が治ると聞いたので、つるを折り続けました。平和記念資料館で、禎子さんの折りづるを見た時私は、禎子さんは、自分も生きたいと思ったけど、世界中が平和になってほしいという願いもあったのではないかと思いました。六年生の秋までは、元気だったのに突然発症し、死んでしまうのがおそろしいと思いました。千羽づるをけんのうした、折りづるの山の近くにある原爆の子の像は、禎子さんの悲しい知らせを聞いた同級生たちが中心になって、平和を守るための記念の像をつくろうと呼びかけ、各地から寄せられたぼ金によって完成しました。私は平和記念公園が、平和への思いであふれていると思いました。

私が、特に印象に残ったのは、被爆体験伝承者のお話です。私は平和大使になってから原爆についてたくさんのことを知りました。特に、生き残ってもかみのもがぬけたり、むらさき色のはんてんが出たり、いろいろながんになったりすることや、被爆二世までえいきょうがあるということがこわいと思いました。

私は平和大使として原爆のおそろしさを、今の世代に、後の世代に伝えたいです。一人でも多くの人が「戦争」と「平和」について考えてほしいです。戦争を知るということはつらいことだけど、私はつらいからそのつらい戦争をもう二度と起こさないために、知るべきだと思います。

「平和大使として広島へ行って」

広島の悲劇と世界平和

東小学校　6年　氏名　野澤　梨紗

一九四五年八月六日、午前八時十五分、いつも通りの一日を送るはずだった広島は一瞬にして火の海となった。一発の原子爆弾によって広島の町は焼け野原になり、地獄と化した。現実とは程遠い残酷な広島の町の風景。そんな広島の町からは肉をむき出しにした人や建物の下じきとなった人々の助けを求める声が後を絶たなかった。

七十三年後、流山の平和大使となった私は広島で戦争のむごさと、平和の大切さを学んだ。

一日目に聞いた伝承者さんの話と、広島平和記念資料館の資料は想像を絶する物だった。戦争によって貧しい生活を強いられていたことや大切な家族などの形見、そして今でも後遺症に苦しむ人々。一発の原子爆弾によって人生を大きく変えられてしまった被爆者たち。被爆者の平均年齢が八十二歳をこえた今、被爆者から直接話を聞くのは難しい。だからこそ、八月六日のことを風化させてはいけないと思う。そのため、戦争を経験していない私たちが、原爆のことについて知り、平和について考えるべきだと思う。

今、友達と遊んだり、笑いあったりできることも平和だからこそできることである。しかし、その平和を創るために日々努力している人がたくさんいる。その人たちが平和を創り、守ってきたからこそ、今の平和な日常がある。

しかし、世界の国全てが、平和というわけではない。今でも、争いがおこっている国はたくさんある。また、食料を満足に手に入れることのできない人もいる。このように、戦争が終わった今でも、日々苦労している人や、苦しんでいる人はたくさんいる。被爆した人たちもその中に入るだろう。このような人が一人でもいれば、世界平和を成しとげたとはいえない。だからこそ、私は広島での経験を生かし、日々努力して、世界平和を創っていく日本人の一人になりたい。

「平和大使として広島へ行って」

平和な世界になるために

東小学校 5年 氏名 黒川 沙希

私の毎日は、平和、それが当たり前だとず
っと思っていた。しかしそれは、たくさんの
人の平和への思いが強かったからだったのだ。
私は、兒玉光おさんについての話を聞いた。
その中で一番心に残ったのは、光おさんは
爆風でこうしゃが持ち上げられたり、熱線で
こうしゃに火がついたりしたかもしれないけ
れど、友達を助けたそうだ。この行動は、勇
気があり、友達思いだと思った。
私の目の前で同じことがおきたら、私はさ
っと、にげたり、泣いたりして、友達を置き
ざりにしていたと思う。
私は、もう一つ心に残ったことがある。
それは、しりょう館で見たことで、両親とは
なれてしまったり、両親がなくなってしま
った子どももいた。その子どもは、私より小さ
い子だった。その子達は、さみしくても、い
たくても、がまんしていたのだと思う。
私にも同じことがあったら、
「お母さーん」

と言って泣いたり、
「お父さーん」
と言って泣いたりしてぜんぜん立ち直れない
と思った。
一発の原爆によって、たくさんの人がつら
い思いをすることになった。いつもの日々を
すごしていたはずなのに、多くの人がなくな
ったり、けがをしたりした。私が思っていた
よりも、たくさんの人がつらい思いをしてい
たことが分かった。
私は、広島での伝承者のおはなしや、平和
記念しりょう館、原爆ドームなどの体験を、
親せきや家族、友達に伝えて、二度とこのよ
うなことが起きないようにし、核兵器のおそ
ろしさを伝え、核兵器のない平和な世界にし
たいと思った。

「平和大使として広島へ行って」

73年前の地獄

東小学校　5年　氏名古宮　遼

73年前の8月6日午前8時15分、広島は美しい川も建物も平和も、たった一つの原子爆だ人によって、すべてうばわれ赤と黒の2色しかない生き地獄に変わりました。

ぼくが平和大使として流山のみなさんに伝えたいことが二つあります。

一つ目は、伝承者の話です。伝承者は戦争では、女も子どもも関係なく殺され、服は統一していて、今とちがって自由に着れませんでした。人として自由がありませんでした。

中学生は、軍人の基地を作るため建物こわしをやったりしていました。

その話を聞きぼくは、「人として自由ができなかった。」という言葉を聞いたとた人心がしめつけられました。今は、日本は戦争をしていないのでぼくは自由にしています。でも73年前は国が決めたことしかできなくて、原爆が落とされる前も地獄だったと思います。

二つ目は、原爆のおそろしさと、それ以上の核兵器のおそろしさです。

原爆は、ものすごい爆風と多量の放射線物しつとあのケロイドなどにしたとても強い光「ピカ」を持っていて、原爆たった一つで広島は、たくさん人の命を失い主した。しかしあの原爆の数百倍の力をもつ核や水素爆だんが世界にはいまだ数十万個もあります。

ぼくはなぜ原爆よりおそろしい物を作るのか、なぜ「平和」をうばおうとするのかがわかりません。

平和大使として流山に帰りこの体験やこの事実を日本だけでなく世界に伝われば、ぼくはうれしいです。

「平和大使として広島へ行って」

戦争の怖ろしさ

小山小学校　六年　氏名柏木悠陽

みなさんは「戦争」をどのように思っていますか。多くの人が「怖いもの」「恐ろしいものだ」と思っていると思います。でも実際は、みなさんが想像する以上に怖く、恐ろしく、残こくなものでした。

ぼくは今年の夏、流山市の平和大使として広島に行き、原爆のことについて学んできました。ぼくは平和大使として広島に行って良かったと思います。一番印象に残っているのは戦争体験の伝承者の方のお話です。その話はとても怖いものでした。伝承者の方のお話によると、原爆が爆発した瞬間、街はけむりの黒と血の赤で染めあがったそうです。これはだれも想像出来ないものだと思います。この原爆での被害者は十四万人で、その中には僕と同じような小学生もいました。一瞬で体が溶けてしまった人もいるのです。この悲しいことが二度と繰り返されないように原爆ドームが当時のままの状態で残されています。原爆ドームは日本で唯一のマイナスの世界遺産だそうです。

広島市民は核兵器による被爆のおそろしさ、平和の尊さ、核兵器の廃絶と世界が平和になるようにという願いをこめて、平和式典を行っています。今回この平和式典に参列した事で、千葉に住んでいるぼくにとっても、この悲劇は人ごとではないと思いました。核兵器のおそろしさは、日本だけでなく世界の人たちに知ってもらうべきだと思いました。そのためにも七十三年前に起きた事を日本に住んでいるぼくたちは忘れてはいけないのです。ぼくは戦争をなくすためには、全ての国が核を手放し仲良くなることが必要だと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

平和への道

流山小学校　6年　氏名田野辺紗英

「戦争はいけない」「平和は大切だ」今、心からそうはっきりと言える人はどれだけいるのだろう。原爆投下から七十三年、今の日本は、平和だ。好きな物を食べて家族と幸せに暮らす、それが当たり前だと思っていた。広島に原爆が落ちてたった七十三年。おばあちゃん、おじいちゃんが生きた時代、一発の爆弾で十万人以上の人が亡くなった。人だけじゃない。犬やねこの動物もいっしゅんにして、死んでしまった。私が平和大使として広島に行った時、広島は自然が多く美しい町だった。七十三年前の広島も美しく、進んだ町だったそうだ。今、原爆ドームと言われるドームは、今でいうデパートのような美しい建物だった。原爆が落ちるまで広島には、大きな空しゅうがなかった。それでも、たった一つの原爆で美しい町は、こわれてしまった。

このころ、ぜいたくは、いっさいできなかった。例えば、学生がバスに乗ることも。その時のスローガンは「ぜいたくは敵だ。ほしがりません。勝つまでは。」それでも、七十三年前も、それぞれ幸せに暮らしていたと思う。一九四五年八月六日八時十五分アメリカの飛行機B29によって、原子爆弾は美しい広島へ投下された。原爆が、爆発点は数百万度となり、〇・三秒後には半径二百メートルの大きさになった。爆心地周辺の表面温度は、三千から四千度になった。鉄がとける約二倍の温度で、爆心地から一・二キロ以内にいた人はほとんどが死んでしまった。また原爆には、放射線がふくまれていて、助かった人も長い間後障害によって今をなお、苦しめられている。私達、小学生は戦争を経験したことがない。実際に戦争を経験したら、きっと私の想像をこえる非さんなものなのだと思う。私が今、心から願うことは、戦争を二度とくり返さないということ。もし、戦争が忘れ去られつらい思いをする人が増えようとした時、「それはいけない事だ」とむねをはっていえる人になりたいと思う。最後に一つ、今ある「平

「平和大使として広島へ行って」

流山　小学校 6 年　氏名 田野辺紗英

和。は当たり前じゃない。ほんの少し前に、国のため、未来のために命をささげ、罪のない人々がたくさんしくなったのだ。たくさんのぎ牲の上での平和なのだ。私達は戦争を忘れず、平和な国、そして世界をつくっていかなければならない。

「平和大使として広島へ行って」

平和大使を通して、感じたこと

江戸川台　小学校　5年　氏名　清水勇志

ぼくが小さいころに広島に行ったときは、原子爆弾とは怖いもので、それによって、何人もの人が亡くなったり、建物が壊れたということしか理解することが出来なかったのですが、今回「流山平和大使」として広島へ行ったことで、原子爆弾は、たくさんの人の命を奪っていったと同時に、たくさんの人の未来や希望も奪っていったということを強く感じました。そして、原爆ドームが被爆時のまま残っているのは、原子爆弾の恐ろしさを、受けついでいくためということも分かりました。

今回の経験で、一番心に残ったのは、被爆体験伝承者の方のお話です。佐々木禎子さんが亡くなったあと、同級生たちが力をあわせて原爆の子の像をつくったというエピソードからは、禎子さんや同級生たちが伝えたかった、原子爆弾の恐ろしさを知ることが出来ました。

他には、被爆者が必死になって生きてきて、未来を生きる子供たちに一生懸命、原子爆弾の恐ろしさを伝えていることに感動しました。

また、被爆者が、今なお、苦しんでいることは、少し驚きました。

また、広島平和記念館では、焼け焦げた三輪車や、まだ中学生だった被爆者の、ぼろぼろになった制服などから、原子爆弾の恐ろしさを知ることが出来ました。

「平和大使」としての一番の目的である、平和記念式典では、平和について考えている人が世界中にたくさんいることや、平和とは決して当たり前のものではなく、たくさんの人の努力によって創られ、守られていることが分かりました。

平和とは、自然に笑顔になれること。

平和とは、人も自分も幸せであること。

平和とは、夢や希望をもてる未来があること。

ぼくは、未来を生きる人へ、原子爆弾の恐ろしさを伝えていく伝承者になり、これから

「平和大使として広島へ行って」

江戸川台小学校　5年　氏名　清水勇志

もずっと、「平和大使」でありつづけたいと思います。

「平和大使として広島へ行って」

命をうばった広島げんばく

東 小学校 6年 氏名 阿部綾乃

今から七十三年前、千九百四十五年、八月六日月曜日。いつもの日常が始まろうとしたときだった。

「ドーン！」

すごく大きな音がした。八時十五分。たったこのしゅんかんで広島は赤と黒だけの町になってしまったのだ。

そこに落ちたのは、重さ四トン、中心温度数百万度、直径四百メートルのげんばくだった。上空六百メートルから落ちたのだ。そこには、ひふがやぶれている人、目がとれている人、「いたい！」「熱い！」とさけんでいる人、助けを求めている人、子どもをいっしょうけんめいに守ろうとする人、体がおちてたおれている人、中には死んでしまっている人だっていた。

気づけば、ほうし。せん物質がたくさん含まれている黒い雨が降っていた。

熱くてたまらない人たちが入っていた水は、いつのまにか赤くなっていた。

もしここに、私がいたらどうなっていたのだろう。そして、もしここに大切な人がいたら、ただ事では絶対にすまないに、ちがいない。このことを考えるだけでも、すごくつらくなってしまう。

「平和」とはぶっつうにあるものではないということがわかった。今だって戦争をしている国だってある。

「平和」とは人間がつくっていくものだ。動物や、植物は話すことはできない。機械だって人間がいないとつくれないのだ。でも争いを起こすのだって人間だ。だからいつどこで何が起こっているかわからない。

これからは、戦争を知らない人たちに、広島でのげんばくのことを伝えていきたい。そして、「争いを起こしてはいけない。」ということも伝えていきたい。

「平和大使として広島へ行って」

平和への道のり

おおたかの森小学校　5年　氏名 酒巻玲江

七三年前、何も知らない人々の命は、一つの原子ばくだんにより、いっしゅんで何十万となくなりました。大人から小さな赤ちゃんまで。私には、なぜ人が始めた戦争で、同じ人の命がうばわれるのか、分かりません。七三年たった今もかくへいきは、世界に約一万四千もあります。かくへいきは、世界にあっては、ならないと思います。

私は、広島平和記念資料館で、被ばく者が描いた原ばくの絵を見ました。そこには、小さな男の子が門にすがり、泣いている絵でした。文には、「白島町縮景園のうら門に通りかかった時、一人の男の幼児が門にすがって泣いていた。声をかけてさわってみると、彼は死んでいた。わが子と思えばむねがつまる」と書かれていました。むねがおしつぶされたような悲しい気持ちでした。きっと立ちながら死んでいったんだと思います。原子ばくだんは、このように、小さな命までもをうばっていきました。この男の子以外にも小さな子どもは、たくさん死にました。また、広島を苦しめたのは、原子ばくだんがばく発した時だけでは、ありません。後障害により長い間人々を苦しめました。折りづるで知られる佐々木禎子さんは、二才の時被ばくし、その後白血病になりました。そして、十二才という短い生涯を終えました。どうしてこのようなことになるまで戦争をしたのでしょう。どうしておたがいをきずつけることを始めたのでしょう。まだわからないことは、たくさんあります。それを調べて、私は、ずっと苦しい思いをした人々の気持ちによりそっていこうと思います。

広島で起こった悲しいできごとと、戦争のおそろしさを流山市の人々に伝えるため、まず、身近な人に、少しずつ、今回の体験を伝えます。命の大切さやわすれてはならない戦争の事実、被害を受けた人々の悲しみ、そして平和の大切さを考えてほしいです。私の平和大使としての使命はこれからも続きます。

「平和大使として広島へ行って」

二度と戦争をしない世の中に

八木北　小学校　5年　氏名 稙垣 百音

私は、平和大使として、八月五日と六日に広島へ行った。七十三年前に広島に原子爆弾が落ちたが、私はまだ生まれてなかったので他人事のように思っていた。でも、今回の平和大使としての任務で原爆が多くの命や平和をうばったことを知り、戦争の悲惨さが分かった。

平和大使として広島に行く前は正直、戦争にはあまり関心がなかった。私は講話を聞いて、被爆者は何万人もいて、今も苦しんでいることを知り、平和である幸せを学び、戦争は悲しいことだと気づかされた。平和は、簡単には手に入らないものだが、戦争は全てを簡単に壊してしまう。だから、戦争は二度と起こしてはいけないし、私たちに無関係なことではない。原爆、戦争の悲しさ、こわさと共に平和は簡単には手に入るものではないことを学んだ。私のやるべきことはあると思う。それは、たくさんの人々に戦争の悲しさを伝えることだ。戦争のことを知らない人が増えてきたからこそ、戦争の恐ろしさを少しでも多くの人に知ってもらいたい。戦争の悲惨さをはだで感じたことを人々に伝えるのが私の使命だ。

帰りの路面電車の中で、お年寄りに話しかけられた。その人は、中学生のとき修学旅行で広島を訪れたそうだ。その人の話しによると、原爆が広島に落ちて「緑が増えるのには二十五年もかかる。」と言われていたそうだ。けれどもその人が、二十年後に行ったらすでに緑が増えていたそうだ。私は、その話を聞いて原爆が広島に落ちた後でも、広島に住んでいた人々が協力し努力して、早く緑が増えたのだと思った。

二度と戦争をしない世の中をつくっていくことが大切だと強く思い、多くの人々に戦争の悲惨さ平和の尊さを伝えていきたい。

「平和大使として広島へ行って」

被ばく者の想い

八木南　小学校　6年　氏名 高橋 直哉

七十三年前八月六日、一発の原子ばくだんによって、広島の町は砕かいされ、数秒で爆風で地ごくへと変わってしまいました。

ぼくが、平和大使として初めて広島をおとずれて、一番しょうげきを受けたのは、被ばく体験伝承者のお話でした。話して下さった方の悲しそうな表情と声が、とても目に焼きついています。

当時、中学一年生だったみつおさんは、教室で被ばくし、校舎がつぶれてみんな下じきになってしまいました。みつおさんは、必死にはい出して外に出ました。すると、みんなひどいやけどで皮ふがズルズルむけて、教室のどのかわきでプールに飛びこんで亡くなっていきました。「元気へい下方さい。」と言いながら…。みつおさんは、友達を必死に助けましたが、とうとう校舎にも火が回ってきました。「熱いよう。お母さーん」と言う友達が代を歌うと。それが次第に、あこがれて入った学校の校歌にかわっていったそうです。

みつおさんは、どうすることも出来ず「ごめんね、ごめんね」と言いながら逃げて、助かったそうです。

ぼくは、この話を聞いてとても怖くて寒けがしてきました。そしてこれ以上話を聞くのがつらくて、二度とこんな事が起こってはいけないと思いました。

この話を聞いてから、ふと「自由」という言葉がうかんできました。本当は、みんなもっと自由にやりたいことをしてきたかったんだろうなと思います。

ぼくは、今、やりたいと思ったことは自由にやる事ができます。こんな平和な毎日がずっと続いてほしいです。そのために、広島で見たり聞いたりした原ばくのおそろしさを、周りの人に伝えていきたいです。そして、みんなが戦争でもくなった人の分まで、自分の命を大切にしてほしいです。

「平和大使として広島へ行って」

おそろしい悪まの兵器

鯖々山崎 小学校 6年 氏名 吉田 健浩

「原爆病は、外見はなんともなげに見せかけといて、やれやれ助かったと安心したところを見計らって、いきなりたましがけにおそうてくる代物じゃ。」

井上ひさしさんは「少年口伝隊一九四五」の中で書いています。

原爆のおそろしさは、熱線や爆風だけではなく、あとあとまで被害が続くことなのです。

ぼくは、平和大使として広島へ行き、そこで伝承者の中野さんから被爆者の児玉光雄さんの話を聞きました。

児玉さんは、当時中学一年生でした。木造の校舎はぺしゃんこにつぶれましたが、机といすのすき間に入っていて奇跡的に無事でした。しかし同級生三百人のうち生き残ったのはわずか十九人でした。

六日の夜に、疎開していた戸坂村の自宅に帰りました。一週間をすぎたころから、髪とまゆげが抜け始め、歯ぐきや目尻からの出血、四十二度もの高熱、紫色の斑点のしょうしょうがあらわれました。しかし九月に入ると熱が下がり落ち着いてきました。その後は六十年なんともありませんでしたが、六十歳を過ぎると、皮ふ、直腸、胃、甲状腺に次々に重複がんを発しようし、手術は二十一回に及びました。

また、細胞の染色体にも異常があり、二本の染色体が切断されるなどひどい状態でした。大量の放射線を浴びて体の細胞が傷ついてしまっていたのです。

原爆は長い間影響を与え続けます。「悪まの兵器」と表現した被爆者の方もいました。

ぼくは原爆というのはおそろしくて、命や夢をうばう兵器だと改めて強く思いました。

現在、世界には一万五千発近い核兵器があるといわれています。

ぼくはこの悪まの兵器を二度と使ってはいけないという声を続けていきたいです。

「平和大使として広島へ行って」

広島へ行って思ったこと

東小学校　6年　氏名嶽野　颯太

ぼくは、流山市の平和大使に参加しました。これは広島市で行なわれる、平和記念式典に参加したり、被爆体験伝承者の、話を聞いたり、また、平和記念資料館や原爆ドームを見学して、戦争の悲惨さや平和の大切さについて考える行事です。

ぼくはこの大使に参加して考えたこと、感じたことが二つあります。

一つは、戦争がとても悲惨だということです。いままで戦争は海外で起きていることというイメージを持っていました。しかし七十三年前に日本でも起きました。しかも、世界初めて、一つの核爆弾が落とされました。ぼくは、資料館に行ってボロボロになった服や、焼け野原になった広島を見て、にわかに信じることができませんでした。たった一つの核爆弾によって、約十四万人の命がわずか一日で失われたことを知り、とても怖くなりました。

二つ目は、被爆した人たちは、今だに苦しんでいるということです。爆弾が落ちた直後は無傷だった人が、何年か後に、白血病などのがんを発症してしまう人が多かったそうです。

また、目の前で人が死んだり苦しんだり、家が燃えたりする光景は、きっとすごくショックで、生き残った人の心の傷はずっとずっと残ったままだと思いました。

広島で、大使のみんなとお好み村でおいしい広島焼きを食べました。これも平和だからできることです。

広島の人々は平和を強く願って努力しています。

ぼくも、この平和を絶対にこわさないでほしいと思いました。

「平和大使として広島へ行って」

平和について

おおたかの森　小学校　5年　氏名佐藤琉生

8月5日から8月6日まで、平和大使として、広島に行きました。なぜ応募したかというと広島に行くきかいなどないし原爆の話を聞けるべると思ったからです。

8月5日広島TKPガーデンシティという所で、被爆体験伝承者のお話を聞いて原爆のおそろしさを知れました。

TKPガーデンシティ広島の外に出て10分歩くと平和記念公園に着いて最初にやったのがおりづる台に千羽鶴を置きに行くことでした。

すごい数の千羽鶴があって平和を願っている人がたくさんいると思いました。

そのあと資料館にいって原爆のビデオを見て原爆の落とされたあとの町なみと今の町なみがすごい変わったと思いました。

あと被爆者の洋服があって、原爆によって黒く焼けていました。

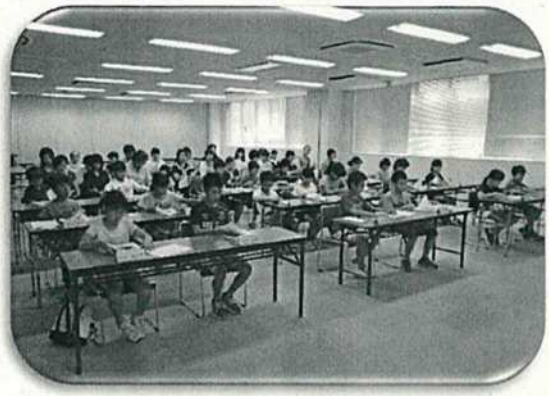
原爆ドームの近くに行きました。

原爆ドームは、黒く焼けてレンガが転がってました。原爆のいりょくは、とてつもなく強いと感じました。

8月6日平和記念公園で「広島の心を世界に」2018年と、平和記念の式典に参加しました。8時に原爆の話がありました。原爆の話の時泣いている人がいました。8時15分1分間のもくとうがありました。なぜの1分がものすごく長いと感じました。

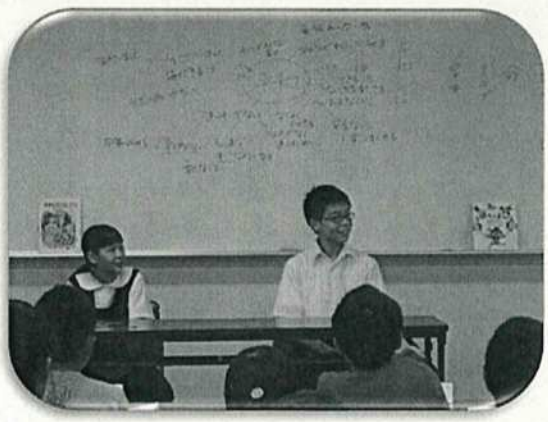
戦争は、ぼくたちが生まれる前たくさん人の命を奪い奪ってきた時代があった。それは知らなくてはいけないけっしてわすれないように心にきめてみんなに伝えていきたいです。

写　真　集



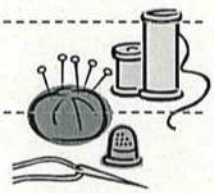
事前に平和学習をしました。

みんなで「命」について考え、「平和」とは何か、全員で意見を発表し合いました。



折り鶴に糸を通す、千羽鶴作りに挑戦しました！

たくさんできました！

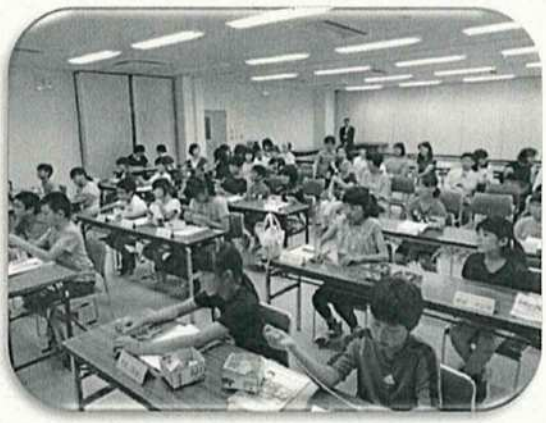


7月7日（土）

平和大使　事前説明会

平和大使としての任務についての説明を受け、真剣に聞きました。

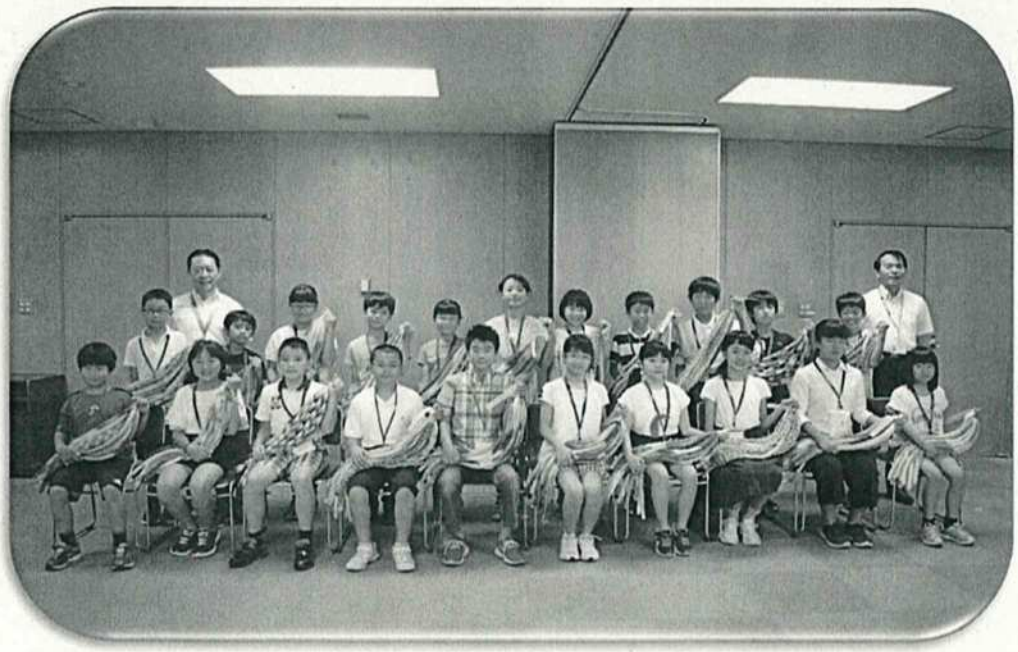
昨年の平和大使２名が説明会に参加して、体験談と今、「平和」について何を考えているのか話してくれました。



7月25日（水）

平和大使　結団式

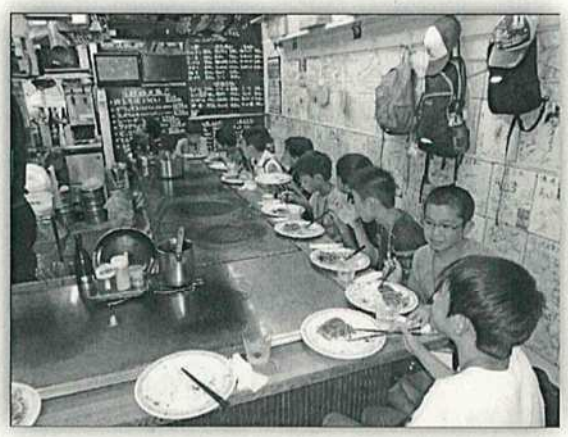
「皆さんは流山市民を代表して広島へ行くのです。見て聞いて学んだことをみんなと共有し、平和への願いをつないでください」という市長の言葉。改めて平和大使の使命というものを感じました。



平和への願いが込められた千羽鶴を手に、広島へ行ってきます！

8月5日（日）

被ばく体験伝承者の話を真剣に聞きました。その後、平和記念公園に行き、千羽鶴を献納しました。



平和記念資料館と原爆ドームの見学をしました。夜は、広島名物お好み焼き！

お腹も満足です！！その後、ホテルでミーティングをしました！

8月6日（日）

平和記念式典に参加し、他のたくさんの人たちと、平和への思いを一つにしました。

式典の後、「ヒロシマの心を世界に」を見学しました。

この日の体験を胸に平和の大切さを伝えていきます。

流山市の平和に関する取り組み

平和都市宣言

私たちは、平和と繁栄を市民憲章にうたい、「豊かで活力ある文化都市」流山の実現をめざしている。

私たちの国は、世界でただひとつの被爆国として、広島・長崎のいたましさと被爆者の苦しみをすべての人びとに訴え、人類共通の願いである恒久平和を達成させなければならない。

私たちは、日本国憲法の平和精神にのっとり、武力による紛争をなくし非核三原則をまもり、すべての核兵器をすてることを訴え、世界平和確立のため、ここに平和都市を宣言する。

昭和６２年１月１日　流山市

平和の像

流山市は、昭和６２年１月１日、市制施行２０周年を迎え、これを契機に平和都市を宣言しました。

そのおり、朝倉家御遺族の御理解のもとに東京都台東区から朝倉文夫作「姉妹」像の寄贈を受け、これを、「平和の像」として市役所庁舎前のプラザの一画に建立しました。

本作品は、朝倉翁が昭和２２年、戦いが終わり平和の喜びを心に秘めて制作したものと言われており、本市が願う世界恒久平和のシンボルとして、永く後世に伝えるものです。

平和施策事業

流山市では、以下の平和施策に関する事業を毎年展開しています。

- 平和大使広島派遣事業
- 平和ポスター展
- 平和祈念の千羽鶴の作成
- ユニセフ平和教室

流　山　市

平成３０年度流山市平和施策事業
作文集「平和大使として広島へ行って」

発　　行：平成 30 年8月
発 行 者：流山市
編　　集：流山市総合政策部企画政策課